ぐるり散策　大月風土記伝説の巻　井上文次郎

七、【塚の伝説　御太刀塚縁起】

『大月駅北側の地（御太刀二丁目興和コンクリート跡地から大月三丁目跨線橋辺は、足下を桂川の激流が絶壁で奔流し、地盤は、いわゆる猿橋熔岩流（約一万年前に生成）の上に黒土とローム層があり、（火山灰腐植土の混じったもの）礫層はないが、所々に熔岩の路頭が見られる平坦地で、古来この地を御太刀原と呼んでいる。（註、この畑地から弥生式及び祝部の土器破片が出土しているが約二千前の生活用具の破片であるため、ここで生活が営まれたのか？他から持ち込まれたのかは定かでない。）

またこの原には古来より、幾個かの古塚が存在しているが、その中に三本の宝刀が埋められていると云う伝説があり、誰云うとなく「朝日さし夕陽輝く山の根に、七つの塚に三の御堂」と云う歌が残っている。』（昭和六年郷土の史跡・北都留連合教育会）

このことは、更に甲斐国志によると、『駒橋駅（人、荷物を運ぶ施設のある宿泊も出来る街道沿いの集落）の西北、川窪と云う地に、古墳五基あり相並びてあり、何人の墳墓なることも知らず、その中に一基奇なる墳あり、冬日は皆雪に埋まるとも、この一基のみ大雪に埋もることなく、顔見ゆ、いかがなることか測りがたし。』とある。この川窪とは、大月三丁目の浅利橋手前の窪地を称するので、直接御太刀塚と関係ないが、多くの墳墓や塚が御太刀原を中心とするこの辺一帯に存在した事は明らかである。

註『ところで御太刀原を御立原と記す記録もある。』

大正十三年刊行の北都留郡誌によると、駒橋字御太刀原より分岐、賑岡村浅利境に至る（村道広里賑岡線）とある。また、大月市の地籍図にも字名として南より宮原、大原、御立原、駒門などが御太刀区に属している。

古代にこの地が開拓されて人々の生活が始まるのは、奈良時代から平安の初期であるが、大きな集落としてではなく、飲み水の得られる所に住みついた人々か？周辺の集落からの出作り地として開かれて行っただろうが、荘園制の進展とともに、大和朝廷の勢力圏に組み入れられながら、初狩、花咲などとともに、大月、御太刀等の地は加美郷（桂川の上）に対して征茂郷（下郷の意）と称されるようになった。（大日本地名辞書）

中世（以下大月市史より）頼朝が鎌倉に幕府を開いた頃（一一九二年）小山田五郎行重が、田原郷を受領し、この地方に勢力を伸ばすかに見えたが、古郡郷（上野原付近）の古郡正重の方が、発展的で大月付近までその支配下に治めてしまった。

この古郡氏が和田義盛の乱に組して、北条氏のために亡ぼされてしまったので、その領地の波加利本荘（初狩）は、武田信光に、波加利の荘（大月の地）は、薩摩の嶋津左衛門尉忠久に与えられた。

一四一六年（応永二三年）室町時代の初め、上杉氏憲（禅秀）の乱に組した小山田氏が猿橋岩殿に戦って敗れ、翌年には反幕府の甲斐の国人一揆（地方の郷士中心の武装集団で反体制勢力）を討伐のため、足利持氏らが攻め入り、鳥沢、猿橋、大月の地で激戦が行われたが、遂に幕府の軍門に降った。

永正一七年（一五二〇年）より、武田信虎の代になり、郡内の勇　小山田氏を征すべく度々進攻し、戦いも各所で行われ、遂にその支配下に組み入れられていくのである。その後、大永二年（一五二四年）信虎が関東官領上杉憲房と組んで、小田原の北条氏綱と戦うこととなり、一万八千の大軍を率いて猿橋に陣した。この時には、直接戦場にならなかったが、労役、徴発、宿舎などの大きな影響を受けている。

岩殿橋が架けられた（強瀬か？扇橋か？）のもこの時である。（扇橋は廃橋）

これらの戦争における死者は相当なもので、それら戦死者の多くは土地住民の奉仕の手によって葬られ供養されたのが塚となり、墳丘となって残ったものであろう。御太刀塚もその戦いの名残か！

『この付近は平安時代の末期から皇室の御料林として管理され、木の立つ原というので御立原と呼ばれ、駒橋村御立原から広里村駒橋字御立原として引き継がれてきた。昭和八年大月町制施行を機に行政区が改められ、駒橋区から独立、御太刀区と呼称することとなった。

この塚からその北の扇橋周辺にかけて幾つかの古墳や墓碑があったことは甲斐国志にも記される。昭和初期、興和産業の工場創設の造成によってそれらが破壊され多くの遺物が掘出されたという。その中でも両刃の直刀一振が注目された。地区創設と時期的にも重なり、御立ちの立ちを太刀とかえて御太刀区が誕生した。この太刀は扇橋詰めの祠に祀っていたが、後にこの塚を建てて祀ったといわれる。」

塚の位置は、県道高月線沿い、旧興和コンクリート内にあり、毎年五月に御太刀区により、古戦場での戦死者の慰霊供養の法要が執行されている。

余談

「遠く鎌倉時代に、今の大月の中心地が、薩摩の嶋津氏の領地であったなど、思考に苦しむが、頼朝との因縁は深く、伝説の中にも、頼朝の存在する話が多い。

嶋津忠久と、頼朝については、姓氏家系総覧第二巻によると、嶋津氏は日向、薩摩「泰氏族、惟宗氏流」日向諸縣郡嶋津荘の下司職より起こる。この荘は頼通より始まり、代々近衛家領で薩日隅三州にまたがる。鎌倉幕府の初め、惟宗廣言の子忠久が下司職となり、三州の守護に任ぜられ、子孫が栄えた。嶋津氏がそれである。この忠久を嶋津系図では頼朝の庶子としている。家伝日、比企判官能員の妹丹後局、右大将頼朝に仕え、寵愛他と異なり、妊時、北條政子の嫉妬を恐れ、上方に忍往、途次道に迷い宿もなく臨産、子は忠久他」

参考文献
甲斐国志
北都留郡誌
郷土の史跡
北都留連教育会誌
大月市の石像物Ⅱ
姓氏家系総覧第二巻

執筆者　井上　文次郎

三月号へつづく…